

## 願望

本来であれば、今ごろはトムラウシ方面のヒサゴ沼野営指定地でキャンプをしているはずでしたが、大雨予報が出たため山行は中止、自宅にいます。呪われたこの夏の降雨量は、農家、山、ガーディナーなど、野外を活動基盤として生活しているすべての人を泣かせたことでしょう。既に来シーズンが恋しい秋です。

私はよく「大雪山になりたい」と思います。鳥になりたい、風になりたい、と同じ感覚です。大雪山みたいになりたい、というわけではなく、大雪山になりたい。（今までは気が知れた人にだけ言っていました、ここは羞恥心を封じて言ってみます）

大雪山になりたい理由は、①下山するのがもったいない。山になってしまえば下山しなくて済み、素晴らしい景色をいつまでも見ていることができる②野生動物のあるがままの暮らしを見たい。特にヒグマは、警戒心が強く、危険が伴うのでじっくり観察することができませんが、山になってしまえばヒグマの存在を常に感じ、子の成長や、冬支度をずる姿など、あらゆるシーンを見守ることができる。



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然解説員などで活躍する人々をリレーしていきます。

「今年はたくさん産まれたね～」なんて思いながら見ていたい。また大雪山固有種の蝶や花は本当に美しく、人間の体一つでは広く見て回れない③どっしりとした大雪山の佇まいは、雄大さ、美しさ、厳しさを併せ持ち、何度登っても飽きることがないので、登れば登るほどにむしろ引き込まれ、好き過ぎて、いつの間にか大雪山になりたい願望になってしまった！（この文章、決してふざけているわけではありません）

とはいうものの、大雪山はいつもどっしりとした大雪山なのです。動物の誕生や満開のお花畑にいちいち感動したり、紅葉が色づいても、<sup>①</sup>「良い」雪が降り積もっても、そのことに一喜一憂したりはしません。大雪山になるには、自分はまだまだ甘い、と承知しています。

生涯大雪山に憧れ、大雪山になりたいと思いながら、登り続けるんだろうなあ、と思っています。

環境省東川自然保護官事務所  
アクティブレンジャー

渡邊あゆみ



## 本で知るふるさととの山

### 91年前、旭岳を初めてスキー登頂

NHK旭川放送局長、那須敦志さんの「なつかしの東川 映像セミナー」が9月7日、農村改善センターで開かれました。NHKが保存している東川関係の映像を観ながら町の歩み、町民の暮らしを振り返る催しでした。

最初に紹介された映像が旭岳にスキーで挑戦する小樽高等商業学校（小樽商大の前身）の映像「大雪の王座」。昭和10年に撮影され、同放送局が保存する最も古い映像の一つのこと。

那須局長によると「フランスのパテ社が売り出していた9・5ミリフィルムで撮影されたようです。当時としては相当高価なものでしょうから、持っていった方はまれでしょう」。NHKが撮影したものでなく、愛好家が映像を持ち込んできたそうです。

那須局長から「ところで、旭岳とスキーの関係、歴史はいつごろからなのでしょうか」と問い合わせをいただきました。そこで開いたのが伊藤秀五郎著「北の山 続編」（1976年、茗溪堂刊）。その中の大雪



大雪山の登山史が分かる書籍の一例

山登山史に次のように書いてあります。

「北大のスキー部は明治四十五年に設立されたが、大雪山のスキー登山は大正十年三月にはじまった。ユコマンベツの造材小屋を根拠地として、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、西尾稔、斎藤謙の五名が参加し、二日間にわたって旭岳を試みたが、山頂近くに達しながら、悪天候のため登頂は果たせなかった。翌十一年一月に再挙げた板倉勝宣、加納一郎、後藤一雄、松川五郎、板橋敬一によって、九日に山頂に達した。朝六時に小屋発、頂上付近はシユタイグアイゼンを用い、午後零時五十分登頂、一時三十分に小屋に帰着した」。

大雪山と人とのかわり合はさまざまな本に書き残されています。高澤光雄著「北海道の登山史探究」（2011年、北海道出版企画センター刊）、安田治著「北海道の登山史」（2010年、北海道新聞社刊）など興味は尽きません。

町史編さん専門員、西原義弘